溺愛三公爵と氷の騎士
～異世界で目覚めたら マッパでした～

★

あこや
Akoya

Noche
BUNKO

目次

溺愛三公爵と氷の騎士
～異世界で目覚めたらマッパでした～ 5

書き下ろし番外編
おとなのための、おとぎばなし。 349

溺愛三公爵と氷の騎士

～異世界で目覚めたらマッパでした～

彼の部屋へ足を踏み入れたとたん、妙な気配を察知した。
体術や各種武器の扱いと共に極限まで訓練した、し尽くした私の五感は動物並だと自負している。
敵意、害意、殺意。
そういったものには無条件で反応するように、鍛えぬいてきたつもり。
けれど、何かが違うようだ。
――おかしい、妙だ、とまた思った。
足音を立てぬよう用心しながら、部屋の中へと歩を進めていく。しかし、身の危険に繋がるような気配はない。
警戒レベルを少し下げ、それでもまだ緊張は解かずに彼の姿を捜す。
誰もいないからといって、彼もいないというわけではない。

玄関ホールから居間へと移動してくる間も、この空間は人の気配に満ちている。
彼――初めての私の恋人は、この部屋のどこかにいるはずだ。
恋人なら出迎えてくれてもいいのにな。
ちょっぴり寂しく思いながら、「でも、一回抱かれただけだったけど」と、私は自嘲気味に口端を上げた。

最後に彼に会ったのは、あの任務に就く前のことだ。
彼と結ばれてすぐ、あの任務のせいで私は激しく落ち込んだ。自分が嫌になって、ふらふらとまるで幽鬼のようにあちこちの街を渡り歩いているうちに、色々あったけれどなんとか立ち直った。
もう大丈夫だと思い、久しぶりに連絡を取ってみたら、そっけない返事と共に日時を指定されたのだ。
きつい暗緑色の瞳、冷たいほどに整った顔。
けれど、私を見下ろす時だけは熱と色を帯びて、それはそれは甘やかなものだったはず。
奇妙な気配への警戒心はようやく少しずつ薄れていった。入れ替わるように、彼と過

ごし、眩暈がするほどの幸せを感じた記憶が溢れ出す。
早く会いたい。
たくさん話をしよう。

広いリビングを斜めに横切ると、寝室のドアへとたどり着いた。
閉ざされたドアを一応形式的にノックする。「リヴェア・エミール、参りました」と、うっかり仕事中のように声をかけてから、返事を待たずにドアを開けて、そして。
――立ち尽くした。言葉を失ったまま。
「指定した時間よりも十分早いな。律儀なことだ」
寝台の上の彼は私を振り返り、唇の端だけを吊り上げている。
薄暗い寝室の中でもわかる、冷やかな笑み。裸で、申し訳程度に腰から下を肌掛けで覆っている。
自堕落に横たわった姿勢のまま、私のほうへと向き直ったその時、彼の向こうに、人影が見えた。
黒っぽい長い髪。まろやかな体のライン。
――裸の女性が、いた。

「もうちょっと遅く来てくれたらな。帰しておいたんだが」
誰を、なんて。
聞かなくてもわかる。
彼は小馬鹿にしたようにくあっとあくびをした。
「なかなか離してくれなくてな。さっきやっと寝てくれたところだ」
どうして、なぜ？
問い質したい。詰りたい。
それなのに、頭の中を言葉だけがぐるぐる回って、私の喉は引き攣れたように言葉を紡ぐことができない。
眼の前の現実を受け入れたくはないのに、私は極めて冷静にこの状況を理解してしまっている。
彼と、彼以外の人のコロンの香り。汗と、生々しい性の香り。
――彼が、私以外の女性を抱いたのだ。

その後、どうやって自分のホテルまで戻ったのか、私の記憶は抜け落ちている。
きっとタクシーにでも乗ったのだろうけれど、運転手の顔も声も思い出せない。

お金を払った記憶すらないが、ここまで戻ってきているのだからちゃんとお会計は済ませたのだろう。

着替えもせずに、ベッドにダイブした。

ナイフのように私をめった刺しにした彼の言葉と、裸の二人の映像が頭の中をぐるぐる回る。

（お前と同じことをしてやっただけだ）

（どこぞの若僧とお楽しみだったくせに。俺が知らないとでも思ったか）

（淫乱）

呆然としたまま何も言えずに突っ立っているだけの私に苛立ったように、彼は私をひたすら罵り続けた。

よほど疲れているのか、彼の隣の女はぐっすりと眠っているようで起きる気配はなかった。

狸寝入りかもしれないが、そんなことはどうでもよかった。

「どうして、なぜ。……好きだったのに」

今になってようやく、声が出た。

自らのその声を待っていたかのように、どっと涙が溢れてくる。信じられないほどの

涙の量だ。

ああ、やっと泣ける、もう泣いていいんだと私は奇妙な安堵を覚えながら目を閉じた。

瞼を下ろしても涙腺は緩んだままで、頬も、顎も、シーツまでもが冷たくなるほどの涙がほとばしる。目と鼻の奥がツンと痛くなってくる。

すべて忘れて、なかったことにしたいな。

私ってば一体いつ、何を間違えてしまったんだろう。

――小さい頃、懐いていた近所のお兄さんがいた。とても優しい人で大好きだったのだけれど、ある日彼は私に悪戯をした。信頼していたからこそ、とてもショックな出来事で……

あの時初めて私は、自らが「女」であることを疎ましく思ったのだった。

そして、その出来事がきっかけで強くなりたいと思い体を鍛え始めた。女子力は皆無になってしまったし、そのせいで寂しい青春時代を過ごしたけれど、面白いほど腕が上がるのが嬉しくて楽しくて、自衛官になろうと思って大学に入った。性別なんて関係ない世界だと思っていたのに、そこでもまた「女性として」たくさん傷ついて傷つけられて、とうとう大学を中退して、語学が得意だったから日本を飛び出して、とある国の外

国人部隊に入った。

軍人としての生活は過酷だった。でも、性に合っていたのだろう。

困難な任務を次々に成功させたし、信頼できる戦友たちに恵まれて、初めて本気で好きになった人にも愛されて、この上なく幸せだった。任務で、胸が張り裂けるほど辛い経験もしたけれど、軍隊からは足を洗おうと思ったけれど、何をするにしても彼と一緒なら頑張れる、立ち上がろう、歩き出そうと。そう思ったのに。

「若僧」と浮気したと誤解され、罵(ののし)られ、目の前で他の女性との情事(じょうじ)の名残を見せつけられて……

リセットしたい。何もかも。そう、人間関係もすべて。ゼロスタートしたい。

そんな思いと共に、私は眠りに落ちた。深い、深い眠りに。頬っぺたをつねられても蹴られても起きないくらい深い眠りに。

月光？　夜明けの光？　……最後に覚えているのは、目を閉ざしていても感じるほどに強く、白い光が部屋中に満ちたことだけだった。

＊　＊　＊

何度目かわからないけれど、寝返りを打ったタイミングで目が覚めた。

はじめはぼんやり、その後だんだん目が慣れてきた。目が覚めても真っ暗だ、と思ったのは気のせいで、柔らかな光がそこかしこの壁龕(へきがん)にともされている。

繊細な彫刻の施された壁龕(へきがん)、華奢(きゃしゃ)な燭台。視線を巡らせて天井に目を向ければ、素晴らしい嵌(は)め込み細工が見える。天井の全体像が見えないのはベッドに天蓋(てんがい)があるからだ。

と、ここで。

「……天蓋(てんがい)、って、そんなものはあのホテルの部屋には……」

なかったはず、と思ったところで、かすかに椅子のきしむ音がした。誰かいる？

「誰⁉」

「こちらが聞きたい。ようやく起きたか」

素早く身を起こし、反射的に枕の下に手を入れる。一人で眠る時には常に、枕の下に銃を置いていた。まあいつも一人だったから、それは常のことだったけれど。その、銃がない。

愕然(がくぜん)としたのと同時に、ベッドの足元から男が現れた。

武器がなければ目の前の人物から奪うのは軍人としての鉄則だ。とびかかろうとした私を、眼前の男は難なく押さえ込んだ。銃がなくて愕然(がくぜん)としたその一瞬があれば、男に

は容易なことだったらしい。こんな状況なのに、男の動きは優美とさえ言えた。
「ちょっ……⁉　ぐ、うぅ」
「大声を出すな。ちょっとこれを咥えてろ」
小布が口に押し込まれ、両手をとられた。
私はおとなしく、ゆっくりと男を見上げた。
薄暗い室内でも艶めいて輝く金髪が緩いウェーブを描いて白皙を縁取り、幾房か、押さえつけられた私の顔の横にも落ちかかっている。切れ長の、琥珀にも見える金色の瞳。高い鼻梁、きっぱりとした唇。猛烈に美しいけれど甘さはなく、女性的には見えない。実際、白いゆったりとしたシャツの襟元から覗く胸板は、しっかりと鍛えられた男性のものだ。
綺麗な男だな、と思った。
「俺の観察は終わったか」
男はわずかに口の端を上げた。
皮肉っぽい表情だな、お綺麗なばかりじゃなくてイケてるな、と能天気に考える。
すると突然、私を押さえていないほうの手で、男はシャツを脱ぎ出した。素肌に纏っていたらしく、すぐに上半身裸だ。

「……‼‼　……ふぅ、ぐぅ……‼」
「誤解するな！　これでも着てろ、ってことだ！　……って、暴れるな‼」
強姦なんて勘弁してほしい！　と思って暴れようとしたが、男はそのつもりではなかったらしい。脱いだシャツを私に被せ……
「目の毒だ」
と言って小さく笑みを浮かべた。
「この状況ではさすがの俺も妙な気になってくる……かもしれないからな」
身元不明の女を抱くほど困ってはいないつもりだが、と言いながら、ようやく私の手を放す。
「とにかくそのシャツを羽織れ。そのままがいいなら止めはしないが」
いい眺めだから残念だが、と切れ長の琥珀色の瞳を私に向ける。顔に、それから私の全身に。
「‼　⁇　……ふぅ⁉　っぐぅ……‼‼」
シャツを抱きしめ、私は絶叫……はできなかった。布が口に入っているから。
私は、マッパでした。ええ、もう、潔く、一糸纏わぬ全裸でございますよ！
……気が遠くなりそうだ。

でも、マッパのままで気が遠くなるのはもっと嫌だ。
どんなにうろたえても、わずかに冷静。我を忘れる、ということができない自分が悲しい。
シャツを羽織って、口の中から布を取り出し、やたらに広いベッドから這い出た。何人で寝るつもりなのか。複数利用前提か？　若いのに金髪、いいご身分だな！　と妙なテンションで考える。
頭の中はぐちゃぐちゃだ。時間の観念がない。
昨日？　夜？　恋人と会う約束をして、彼の部屋へ行ったはずだった。彼は居間にはいなくて、寝室にいて、そして。
（他の女性を引っ張り込んでいて、おまけに理不尽に罵倒されまくったんだっけ。私が若僧となんとかかんとか）
奥手もいいところだったから男性経験は彼だけだった。それも、初めて想いを交わして、抱かれたのが半年以上前。知り合ってから二年は経っていた。
恋愛経験に乏しいため、想いが通じてもその先の行動がわからない。忙しいのに誘ったら非常識かな？　メールしてもいいかな？　うるさがられる？　とかなんとか考えているうちに、二回目の行為も清いデートもないまま半年過ぎて。

（なのに、嫉妬されたのかな、あれ。だからって、わざと私に見せつけるように女を呼ぶなんて）
「若僧」とあの人が呼んだ男は、確かに彼よりは年下だから間違ってはいないのだけれど、でも、そんなに若いわけではない。今年で三十、と言っていたと思う。
フェンシングのオリンピック選手で、実力と美貌で鳴らした男だ。
あの任務が終わった後、心が折れて、お気に入りだった世界遺産と紺碧の海で有名なリゾート地を旅していた時、その男、「若僧」と知り合った。
彼はとても遊び慣れていて、私に対しても一夜の誘いを投げかけたが、恋人もいるし傷心の私は当然お断りした。すると彼はかえって面白がって、その後もごはんにドライブにと、一人旅とは名ばかり、ほとんどホテルに引きこもりだった私を連れ出してくれたのだ。
彼に下心がなかったとは思わない。けれど、私たちはあの人が想像するような関係ではなかった。
それに、彼のような世慣れた男だからこそ、男あしらいに不器用な私を無理やりにでも引っ張り出して、まともにしてくれたのだと思う。
彼はスポーツ界のセレブだったから、一緒にいた私も知らないうちにあれこれ写真を

撮られ、拡散されて、そこからあの人に誤解されたらしい。確かに、恋人がいる女としては不用心だったのだろう。

でも、問答無用で罵倒し、報復とばかりに私を呼びつけた上で他の女と絡んでみせるなど、あんまりじゃないだろうか。それにあそこまで激烈に責め立てられるほど、そもそも私とあの人は深く結びついていただろうか？　恐る恐る送ったメールも、二回に一回はスルー、返信がきても一言二言だったのに。

今思うと私はいつも、彼の顔色を窺っていたように思う。嫌われないように、馬鹿にされないように。

あの人も私の顔色を窺っていたというが、私があまり色事に興味がないと思い込んでいたらしい。だから、二回目に誘うタイミングを計り損ねたのだと。節穴すぎて泣けてくる。

本来は言われ放題をよしとする私ではない。いくらショックだったとはいえ、一方的な弾劾に反撃することもなく言葉を失って突っ立っていたのは、愛した人の節穴っぷりに落胆した、というのが最大の理由だろう。

まあ何を言ったところで、無意味ではあったろうが。こちらの言葉に聞く耳を持つ様子は激高した彼にはなかったし、目の前に私ではない女性と彼との既成事実がある以上、

踵を返してその場を去る以外、私に何ができただろう。

四つん這いでもぞもぞとベッドから這い出ながら、私はそんなことをとりとめなく考えていた。

（で、泣いて泣いてそのまま寝ちゃって……、起きたらどこですか、ここは）

ようやく広すぎるベッドの端にたどり着き、私は金髪美形のシャツの中で体操座りをした。身頃はたっぷりしているが丈が微妙で、「シャツ」として羽織ると微妙なところや足の大半が見えそうなのだ。

初心なふりをするつもりはないが、初対面の人に見せびらかすものではない。たとえ、すべてを見られた後だとしても。女性の嗜みってものだ。

あらためて、金髪美形のほうを見やる。

まばゆい金髪。整った顔立ち。私にシャツを貸してから、ソファにかけてあったらしい膝掛けを無造作に羽織ったようだが、それさえもまるで舞台衣装のように華やいで見える。

「君は何者だ？　なぜ、ここにいる？　間諜や暗殺者の類いではなさそうだしな」

「どうして断言できますの？」

思わず、聞き返してしまった。

しつこいようだけれど私は軍人なのだ。だった、と過去形にするべきか。
どちらにせよ、多くのゲリラ戦にも身を投じてきた私としては、間諜だ暗殺者だと言われたほうがしっくりくる。それを、そんなものではないと断言されるとむしろもやもやする。
荒事からは足を洗うつもりだったのに、複雑な心境だ。
「そりゃ、全裸で襲撃はしないだろう。色仕掛けならわかるが」
そうでした。私、マッパでしたね。失礼致しました。
金髪美形は含み笑いをした。
「色仕掛けに来た挙句、標的が現れる前に熟睡するというのもあり得んな」
それもそうですね。
「では、名乗ってもらおうか。どこの者か。名は何という?」
琥珀色の瞳が、鋭く光った。
(……まあ、当然の質問ね)
思考はまとまらないままだったが、私は一つ頷いて——
「……リヴェア・エミール」
とりあえず名乗った。

一瞬、詰まりかけたが、やはり私はこれでいい。
両親がくれた、「画数で決めた」「縁起の良い」正式な名前もあるが、それは私が覚えていて、大切にしていればいいだけのことだ。日本から出た時に決めたこと。その後は誰にも言っていない……とはいえ彼は調べ上げていたようだけれど、今はこの名前でいい。何年も、ずっとこの名前で通してきたから。
「リヴェア・エミール」
男がゆっくりと反芻した。形のよい唇から丁寧に紡がれる私の名は、たいそうなものに聞こえてくるから不思議だ。
「君はどこから来た? 何をしに来た?」
「それが、わからなくて。……あ、どこから、というのぐらいは言えますが」
私は滞在していたホテルの名前と都市名、国を正直に言った。嘘をつく意味などない。もとより、私自身が、ここはどこで、男が何者なのか、自分がなぜここにいるのか、そのすべてを聞きたくて仕方がないのだ。
質問に質問で返すのは失礼な気がして、さらに言い募る。
「何しに来た、なんて、わかりません。ぐっすり眠って、目が覚めたらここにいて」
「そんな街も国も、聞いたことがない。その上、何をしに来たかもわからないとは。そ

れを、俺に信じろと？」
「信じていただくしかありません。あなたがおっしゃったんですよ。こんなあられもない姿でぐうぐう寝てる女の目的なんて想像ができますか？　目的なんてなさそうでしょう？」
「わからんから聞いている」
「私はもっとわからないんですよ！　服を着たまま寝たはずなんですから！」
「全裸は趣味ではないのか」
この男、品のよい顔をしてなんてことを言うのだ。
「趣味ではありません！」
「俺は寝る時は全裸だぞ」
「聞いてませんそんなこと!!」
場にそぐわない男の茶々に思わず声を荒げてしまい、私は少し頭を冷やした。
「……とにかく、妙齢の女性が、知らない男性のベッドで一糸纏わず眠りこけることはめったにないですよね？」
「まずないだろうな」
「そうですとも！　私は別に記憶をなくしてもいません。ちゃんと、正気です。……リ

ヴェア・エミール、年齢は二十、ン歳……」
まあそれ以上の話は後にしよう、と私は思った。
不審者だが危険人物ではないようだとせっかく思ってくれているらしいのに、自分から「職業は軍人です」などとキナ臭い話をする必要はない。
今は初対面のこの美形に、悪意を持たれないようにすることが第一だ。
私は少々ぎこちなく、にっこりと、でも、あえて不安そうに笑ってみせた。
眼前の金髪男は面白そうに口の端を上げて、その瞳を変わらず私に向けている。私が多少不安がってみせたところで簡単には乗ってくれなさそうではあるが、それでも剣呑な光は少し和らいだように感じた。
「これが夢でなければ、私にとっては異世界転移のようなものです。正気なのに、自分のこと以外何もわからない。ご不審なのは承知ですが、私自身は何しろ不安で不安で」
……不安なのは本当だ。頭の中がクリアなようでそうではない。「リアルな夢だ」と思う自分と、「どこか違う世界に飛ばされた」と認識する自分が同時に存在している。
私の不安、怯えにも似た感情は伝わったらしく、男は真面目な顔をした。
真剣な表情は男の顔立ちが整っているのをより一層際立たせる。美形っぷりが跳ね上がりすぎて、こんな状況だというのに目が潰れそうになった。

「……不安なのは嘘ではなさそうだな」
「不安、以外は嘘だと？」
「名前など、どのようにでも言える」
おっしゃる通り。
「年齢も、まあそんなものだろう。それよりも、君は今〝異世界転移〟と言ったな」
「言いました」
「あり得なくない。というか、信じるしかなさそうだ。というのも」
男は、長い脚を持て余したように組み替えた。
「ここは俺の寝室。この国で、ここ以上に厳重に守られている場所はない。城の最上階、扉の前には衛兵。窓の下にも衛兵。天井裏にも備えがいる」
「備えがある、のではなく、〝いる〟ですか」
護衛が配されているのだろう。忍びとか、軒猿（のきざる）みたいなのが。
男は表情を変えなかった。私の言葉はスルーだ。
「……どこからも、入ることはできない。君は、どこからも来ていない。君自身に説明ができなければ、誰にも説明はできない」
「あの、この世界に魔法ってありません？　瞬間的にぱっと消えたり現れたり」

「ないな、そんなもの」
一刀両断だ。異世界ときたら魔法、とちょっとだけ期待したのだけれど。
「それに、星見（ほしみ）の塔の奴らが面白いことを言っていたのを思い出した。関係があるかどうかは知らんが」
星見（ほしみ）。天文学だろうか。お綺麗なネーミングだ。
「昨晩、よくわからないがいくつかの星が一直線に並んだらしい。極めて強い重力や、熱源を持つ星ばかりがな。重力の強い星は互いに強く引き合い、光さえ呑み込んで暗黒を増し、輝く星々は互いを照らしまばゆいばかりに煌めいたとか。煌めいた、といっても数秒のことだったがな。昨晩はその瞬間を城の庭園で楽しむ宴があって、俺もそれを見ていたのだが」
男は言葉を切って、わずかに肩をすくめた。
「笑っても構わないが、星見（ほしみ）の塔の者が言っていた。常ならぬことが起こっておかしくはないと」
「常ならぬ、こと？」
「例えば、君の言う〝異世界転移〟」
笑っても構わない、などと言う男自身の目は、まったく笑ってはいなかった。

もちろん、私も笑うどころではなかった。
〝異世界転移〟。そういう類いの小説も映画も好物だが、自分は安全圏にいることを無意識に確信しているからこそ楽しめるものだろう。
けれど、それがまさか。自分に起こるなんて。
「……ま、考えても仕方のないことだと思うぞ、俺は。一応、あり得ない状況下に君がいるという理由付けをしてみただけだ。〝異世界転移〟が稀有なことだとしても、一度発生したことはもう一度発生するかもしれないしな。そうしたら君は帰れるのかもしれんぞ」
とりなすように、男は言った。
思わず、私は男を睨む。
「星が一列に並んだとかいう事象。星見の塔が騒ぎ、宴を催すほど稀な出来事なのでしょう？」
「まあな」
「以前、同じことが起きた記録は」
「ないらしい」
「次に、同じことが発生する確率は？」

「……ナントカ十億の一千乗年後、とか、まあそんなもんだ」
「それ、あり得ない、って言葉に置き換えたほうが正確では？」
「かもな」
しれっと男は言い、表情を消して私を見る。私はせいぜい彼を睨むことしかできない。
金髪男は居ずまいを正した。
「いいかげんなことを言ったのは悪かったが、俺の部屋に現れたからには、先のことは助力しよう。というか、助力せざるを得ないだろう。君を不審者として摘まみ出したら、多数の人間の首が文字通り飛ぶ。警備、危機管理、あらゆる点においてグラディウス家の沽券にかかわるからな」
「グラディウス家？」
「……ああ。俺の一族だ。そしてここは、俺の城の一室」
男は、真っ直ぐに私を見据えた。
強く、濃い金色に輝く瞳。下手な嘘をついても、見透かされそうな。
「俺の名はレオン。レオン・エヴァンジェリスタ・ド・グラディウス。グラディウス三公爵家の一つ、通称エヴァンジェリスタ公の当主だ」
「さん、こうしゃく」

三人の公爵様。彼がそのうちの一人。エヴァンジェリスタとは？

……よくわからない。偉い人だということはわかったが。

男は辛抱強く解説を続けた。

「グラディウス公爵家、というのがもともとあって、ここ一千年くらいは三つに分かれているのだ。優劣はない。単に一族の運営上、三家で動かすのが最適、と昔々の当主が判断したらしい。それがグラディウス三公爵、と呼ばれる所以（ゆえん）だが、それぞれに従う者たちからすれば、区別がないと困るだろう？　どの公爵家に属するか。それで通称がある。レオン、の後にくる〝中間名〟をとって俺は〝エヴァンジェリスタ公〟と呼ばれている」

「若いのにいいご身分」も何も、本当に立派なご身分だった。美貌に若さに権力。まあ素晴らしいこと。非常識に広いベッドもやむなし。二名以上の複数利用可。わかるわかる。群がる花々。めくるめく酒池肉林の世界……

私は納得して神妙に頷いた。神妙な顔をしているつもりだったが、そうではなかったのかもしれない。金髪男、もといエヴァンジェリスタ公は、「君は何か失礼なことを考えているのではないか」とぶつぶつ言っていたが、「君は俺のことをレオンと呼べばよい」と寛大にも仰せられた。

「いきなり名前で呼ぶなんて恐れ多いですよ」

「恐れている顔には到底見えないがな」

「顔につきましては、ひらにご容赦を。でも、本当ですよ。これからお世話になる方、それも〝一族の当主〟たる方を名前でなんて」

「……意外にまっとうなことを言う。人の寝台で全裸で寝ていたわりには」

「だから、望んで脱いだわけではありません！」

「まぁ、眼福だったし、望んだかどうかなんてどうでもいいさ」

「ご自分で振っておいてどうでもいいとか、本当に偉い人ってのは……」

なんて気ままなんだ。

「とにかく、俺の呼称は俺が決める。君は俺をレオン、と呼ぶように」

最後は、柔らかくも否とは言わせない威厳で、私を黙らせた。

仕方がない。

私はふぅっと一つ息を吐いた。

「レオン、様」

「それでいい。今は、な」

レオン・エヴァンジェリスタ・ド・グラディウス公爵様は、意味深にそう言って、満

足気に微笑んだ。
「……さて、リヴェア」
「！　……はい」
今、さらっと、名前呼びされた！　まぁ、いいけれど。エミールさんとか言われても気持ち悪いしね。とはいえ艶のあるテノール、ずん、と腰にくるので不意打ちはやめていただきたい。
「理屈はわからないが、君はここにいる。星の並びだか超常的な力が働いたのか、正確な理由はたぶん誰にもわからない。ならば俺がすべきことは、君の戸籍を作ることだ。ついでに、身分も。この二つは不可欠だ。これからの君のために」
レオン様は淡々と言った。
思考の切り替えが早い。とても切れる人のようだ。この人の権力は、張りぼてではないのだろう。
「俺の傍らにいるとなると、ただ身元を作るだけでは心許ない。身分がいる。グラディウス家は実力主義だが、実力を発揮したこともない者をいきなり登用するのはさすがに無理だ。身分があれば、ある程度なら問題はないが」
何から何まで、おっしゃる通り。〝俺の傍らに〟というところについて、もう少し説明を求めたいところだが。

「俺の一存でどうにでもなるとはいえ、辻褄合わせや根回しは相当必要だろう。……さて、まだ夜半だし、宴の後で今日は公休だし、ちと気が引けるが……」
あいつを呼ぶか。
独り言のように、レオン様はそう付け加えた。
あいつとは？
「俺の副官だ」
黙って首を傾げた私に答えるように、レオン様は言った。
「とんでもなく優秀な男でな。あらゆる分野に突き抜けていて、不得手なことなど何もないんじゃないか？　俺はいつもあいつに、天才は早死にするというからもう少し阿呆になれ、お前がちょっとくらい阿呆になってもその辺の秀才十人分くらいにはなるから、と言ってやっているんだ」
屈託ない笑顔で、レオン様は言った。
純粋に、その人のことを高く評価しているようだ。この人自身も相当な切れ者だろうに、副官のことをこんなにも褒めちぎるなんて。
……素敵な、人だ。ご身分や、姿形だけじゃなく。

私はあらためてレオン様に見入った。見惚れた、といったほうが正しかったかもしれない。

レオン様はそんな私をちょっと真顔でしげしげと見てから、にやりとした。

色気のある悪党面、という感じ。

「いい目をするじゃないか。その調子だ」

わけのわからないことを口にする。

私は我に返って、思わずおうむ返しに問いかけた。

「……どんな目ですか、それ」

「隙だらけで、男をその気にさせる目だ」

「からかわないで下さいな」

とたんに、不快な記憶がいくつもフラッシュバックする。

女というだけで、どれだけ辛い思いをしたか。きっと私が辛かっただけじゃなく、周りにも迷惑をかけたり、不快にさせたりしていたのかな。きっとそうに違いない。私のせいで。

少し気持ちがどんよりしかかったが、レオン様の次の行動に私はのけぞった。

「⁉　……ちょっと、レオン様、何してらっしゃる……⁉」

「……あぁ、思った通りだ」

私の隙をついて、レオン様はいつの間にか立ち上がっていた。体操座りをする私の前に移動し、両肩に手を置いて身を屈めて顔を寄せている。

私の、うなじに。

「……君、いい香りをしている。数種の香草と、柑橘一種、あとは……君自身の香りだ」

レオン様は、私のうなじの匂いを嗅いでいたのだ！

薄暗い寝室。若い男女。男の吐息をうなじに受けて、女はえも言われぬ感覚に身を震わせ……

って、状況だけみればとっても色っぽいんですけれど！

首元に感じるのは吐息ではなく、鼻息。興奮してるのではなくって、匂いを嗅いでる⁉

「……物凄く、いい香りだ。まずは、君のその香水？　を調合させて、君に纏わせて。それからちょっとばかり君が興奮するといいのか。たぶん、それでこの香りに……」

切れ者。素敵な人。私、先ほど確かにそう思いました。ええ、確かに。でも、その前に。

……匂いフェチの変態公爵でいらっしゃいましたか。

私が美形公爵様の衝撃の嗜好に固まっているうちに、彼は最後に一つ、深呼吸をして立ち上がった。

たいへん、ご機嫌が麗しいご様子だ。

正直、ドン引きで彼をまじまじと見ていると、レオン様は朗らかに、

「君のその香水、気に入ってるからつけているのだろう？　……安心しろ、俺が同じものを作ってやる。というか、指示して作らせよう」

と、のたもうた。

いいえ、お気持ちだけで十分です、と即答することなく、私はかろうじて礼儀正しく沈黙を守る。

この方は香水をプレゼントして私を喜ばせたいのではない。

香水をプレゼントして私につけさせて、あろうことか興奮させて私の発する体臭と香水のハーモニーを楽しみたいと思っているのだ（詳細に解説するとあらためてマニアックだ）。

そんなものをもらったら、今すぐつけてみろ、とか言われて、さらに、私が興奮するためにどんな不届きなことをされるのやら。考えたくもない。

一人震えている間に、レオン様はすい、と表情を引き締めた。

長い指を変わった形に組んで唇にあてると、一瞬、びゅっ、と鋭い音を立てた。いわゆる「指笛」とはまったく異なる、かなり特殊な音だ。

すると、どこからかすぐに、似たような音が短く二回、かすかに聞こえた。

天井から？

「すぐに、あいつをここへ。大人の女性が一人、隠れるくらいの絨毯を担いでくるようにと」

レオン様は顔を天井に向けて、短く言った。

するともう一度、天井から先ほどの音が短く二回聞こえた。了解、という意味なのだろう。

リアル忍び！　便利だな！

「廊下の衛兵に伝言するより、このほうが早いんだ」

と、レオン様は言った。

でしょうね、と私は黙って頷く。あれは何？　どうやって、誰に頼んだの？　とか解説を求めるのは野暮な気がする。必要があれば教えて下さるだろうし、たぶん今は、私にとって必要な情報ではない。

「……それより、彼が来るまでに君のその格好をなんとかするか」
そうだった。今の私は、男物のシャツの中で、体操座り。
「俺の趣味のように思われる。まあ、誤解されたところでなんということはないし、彼には事情は説明するつもりだが。それにしても、君の女性としての尊厳、というものがあるだろう」
紳士ですね。まあ、公爵様ですものね。
「俺のローブでも着ておくか。で、そのシャツはもう一度俺が着る」
レオン様は壁際へ歩み寄ると、どこかを軽く押す。すると、どういう仕掛けか、タペストリーが一枚巻き上がった。壁も動いて、ぽっかりと空間が出来上がる。クローゼットらしい。
いったんレオン様の姿が消え、またすぐ現れる。彼はローブらしき白い柔らかそうな布のかたまりを手にしていた。
「寝台の帳(とばり)の中で着替えるといい。そら」
ローブをぽーんとこちらに放ってくれた。ありがとうございます、と言って私はそれを両手で受け止めようとして……もとい、受け止めて、バランスを崩した。
「うわぁっ!!」

バランスを崩した私は、ローブを抱きしめたまま、前のめりにベッドの端から転げ落ちた。
……そう、ノーパンで（もともと全裸なのだから当然だ）、シャツの中で体操座りの格好のまま。
ぱんつを穿かないハンプティ・ダンプティがでんぐり返しの最中にばたばたしているところをご想像いただきたい。シャツから膝が抜けない。
でも身動きすると、真上から私の、お尻や恥ずかしいところが……！
冗談じゃない！　もちろんＡＶでもない！
「!!　……助け、いや、見ないで下さい!!」
「……見るなと言われてもな。まぁ、これ以上は近寄らないから落ち着いて膝を抜け」
「そこは見ないと言って下さいよっ」
自主的に羞恥プレイを披露する羽目になり、起き上がってシャツを脱ぎ、ローブに着替えた頃には私は涙目になっていた。
何を言ってもこっぱずかしくなるだけなので、黙ったままシャツを手に、壁際にいた（確かに、近寄らないという約束は守ったらしい）レオン様に近づく。脱いだシャツを今から着るというので、わざわざ畳むのもなんだし、着せて差し上げようと思ったのだ。

「……ああ、ありがとう」

シャツを手渡しされると思っていたらしいレオン様は、軽く目を瞠(みは)った後、すぐに私に背を向けた。手を借りることが当たり前なのだろう。ごく、自然な動作だ。

白くなめらかな肌には、意外にもあちこちに大小の傷があった。背中には程よく筋肉がついている。無理をして作った硬い筋肉ではない。しなやかに、美しく鍛えられた男性の背中。後方で、十重二十重(とえはたえ)に守られているだけの公爵様ではないのかもしれない。

シャツの袖に手を通してもらい、前に回ってボタンを止めている最中に、控えめなノックの音と共に、「カルナック大佐殿がお見えです」と、衛兵の声がした。

……カルナック大佐。レオン様いわく、天才肌の副官。

入れ、と応答するレオン様の声と同時に、扉が開いた。長身の男性が、絨毯(じゅうたん)を一巻、肩に担いでいる。この真夜中に（夜半、とレオン様が言っていた）、お気の毒なことである。とても珍妙な光景だ。

私は同情しつつその男性を眺めた。

レオン様のシャツと似たような、でも、レオン様のそれよりはもう少し体の線が出る黒シャツに黒のパンツ、黒のブーツ。黒づくめで、先ほど「副官」と聞いていなければ、この人が忍びかと思ってしまう出で立ちである。覆面していたら完璧なのに、と思いな

がらお顔を拝見し。

「……」

固まった。

「……こちらを、床に置いても？」

「ああ、その辺に置いてくれ。用途はいずれわかる」

「……もう、わかったような気が致しますが」

「だろうな」

「何事かと思いました。あなたが、こんな時間にこのようなことを」

「悪かった。しかし、どうしても内密に、そつなく根回しすべき緊急事態が発生したのだ」

「あなたが女性のことでやらかすとは」

「やらかしてはいないが、まあ成り行き上だ」

気安い会話が隣で交わされる中、私はまだ石化していた。

……カルナック大佐は、猛烈な美形でした。人外レベルの美形でした。的確な言葉が見つかりません。

耳を覆うか覆わないか、くらいの真っ直ぐな銀髪。宝石のような濃い紫色の瞳。左右

対称に、完璧に配置された目、鼻、口。玲瓏（れいろう）たる美貌は、女子の好物、細マッチョ体型と相まって、神の手による彫像のようだ。手足は長くて、当然、というべきか、長身である。二メートルくらいはあるだろう。

この容姿でさらには天才。天は二物を与えずというけれど、ありったけ与えられている感じだ。

「……リヴェア。俺の副官のカルナック大佐だ」

「オルギール・ド・カルナックと申します」

涼やかな、テノール。レオン様の艶っぽい声とはまた違う。

彼は無表情に私を見つめた。

「……リヴェア・エミールです」

どうにかこうにか、私も名乗る。声を出したことによって、私はようやく平静を取り戻すことができた。

カルナック大佐は、紫水晶のような瞳で、私を冷静に観察しているようだ。

どのような判断を下したのかわからないが、程なくして彼は軽く頷く。そして右手の拳を左肩にあて、恭（うやうや）しいと言ってよいほど深く、腰を折った。

騎士様の正式な挨拶だろうか？

そんな彼を、レオン様は興味深気に眺めながら、珍しいな、と呟いた。

＊　＊　＊

薄暗い寝室での立ち話を中断し、私たちはレオン様の居間に移動した。寝室とは内扉で繋がっている。

広い。でもだだっ広いわけではない。重厚で、けれども堅苦しすぎない、落ち着いた調度品が並べられている。

中央にはソファセット。金糸の織り込まれた山吹色の布が張られたソファは、とても座り心地がよさそうだ。壁際には、おそろいの寝椅子もある。

大きな窓は、ソファより少しだけトーンを落とした色のカーテンで覆われている。

大きな燭台がいくつも置かれ、タペストリーも寝室とは異なる華やかな柄。黄金色系の布がそこかしこにあしらわれていることもあり、部屋はとても明るく感じた。

二人にとっては勝手知ったる場所だからだろう。誰がどこに座るかなどの声掛けもなく、さっさと二人は腰を下ろした。さて、私は。

どこに座ればいいですか？　と聞こうとした矢先、レオン様はごく自然に私の手を引

いて腰に手を回し、自分の膝の上に私を乗せた。
もう一度繰り返すが、膝の上に。
「……あの、レオン様。これは、ちょっと」
公爵様の硬い脚の感触と、至近距離のまばゆい美貌にうろたえ、私は口ごもる。
「閣下。何をなさっておられるのですか？」
無表情に、カルナック大佐は言った。
「……何って、見ての通りだ、オルギール」
レオン様の大きな手が私の腰あたりを軽く撫でまわす。
冗談めかしているとはいえ、居心地が悪いことこの上ない。
「こうやっていると、俺がこの女性に骨抜きに見えるかな？」
「面白がっておられるようには見えますが」
膝に乗せたくらいでは、骨抜きなどとてもとても。まさかあなたが。
と、カルナック大佐はにべもなく言い放った。
「ノリの悪い男だな」
「その必要を感じません。本来なら業務時間外ですので」
「その通りだ。呼びつけて悪かった」

レオン様はさして悪びれもせず、相変わらず私の腰を撫でながら、膝に乗せた私を見上げた。
そして表情を引き締め、あらためて信頼する部下に目を向ける。
「……オルギールに頼みがある。リヴェア・エミールの戸籍と、身分を大至急作ってほしい。明日、じゃないな。もう夜明け前だから今日中に」
「立ち位置はいかがなさいますか？　骨抜き、とおっしゃいましたが。女性として愛でるだけの身分でよろしいなら簡単ですが、今後執務に携わらせるおつもりなら、それ相応にしなくてはならないでしょう」
「君は、今後どうしたい？」
レオン様は、不届きな手をようやく止めて言った。
「君一人くらい、どのようにでもできる。飼い殺しになりたいか、何をしたいか。何ができるのか」
寄る辺ない君の希望をかなえよう。
親切そうな言葉だが、琥珀のような金色の瞳に浮かぶ皮肉な光を見れば、額面通りになど到底受け取れない。
私の回答次第で、処遇が決まる。下手をするとこの先一生にかかわるだろう。

……したいこと？　マッパで異世界転移して、したいことなど何もない。
いまだにまだ、夢オチかもとほんの少し思っているのに。
何も、思い浮かばない。でも、何ができるのかと問われれば。
柔道、空手、特に、カンフー。剣道、フェンシング、刀子投げ。弓道、アーチェリー。馬術。もちろん、銃火器の扱いも特殊部隊の教官をこなせるほどの腕前だが、この世界に銃火器はなさそうだ。
最も得意とするのはゲリラ戦だ。とにかく、軍事全般に長けた私は、「鋼のリヴェア」と二つ名がつくほどだったのだ。
これを伝えて、危険人物と、今更ながら排除されないだろうか。
黙って私の答えを待つ二人の気配を感じながら、私は唇を噛みしめた。

＊　＊　＊

今、私はカルナック大佐に担がれて移動中である。
絨毯に巻かれているので、周囲の様子は見えない。
カツンカツンとカルナック大佐の軍靴の音だけが、やけに耳に響く。

静かだが、でも、無人ではないらしい。部屋を出た後、衛兵が挨拶する声がしたし（絨毯を運ぶ手伝いを申し出て、カルナック大佐に即効で断られていた）、歩を進めるごとに、黙ってかかとを鳴らす者（たぶん、敬礼をしている）、お勤めご苦労様です、と声をかける者など、相当数の人間の気配がする。警備の兵士たちなのだろう。
夜半に絨毯を担ぐ彼は、物凄く違和感があったに違いないが、誰も事情を尋ねようとする者がいないのは、さすがと言うべきか。無駄口は叩かない。よく、躾けられている。
長い廊下を歩き、階段を数階分は下りた。いくつかの角を曲がる気配ののち、ようやく扉の音がして、室内に入ったとわかる。
「エミール殿。寝台に下ろしましょうか」
感情のない声で、カルナック大佐は言った。
「……いえ、床に置いて下さい」
私は、慌てて答えた。さっきまで床に転がしてあった絨毯を、これから自分が寝ることになるだろう寝台に置いてほしくはない。
「入退城記録のない人間」を運ぶために絨毯で隠したのは理解できたが、どこにあったかわからない絨毯に入るのだって本当は嫌だったのだ。
「床に置いて、転がして下さいな。巻いた絨毯から一人で出るのって、結構難し

くって」
「わかりました」
丁寧に絨毯が下ろされる。目を瞑ってころころと転がり、私はようやく解放された。
思わず伸びをしながら、大荷物を運んでくれた彼にお礼を言おうと目を向けると。
鋭く光る、紫の瞳が間近にあった。極上の宝石のようなそれがわずかに細められる。
「!?」
私は間一髪で身を反転させ、彼の手から逃れた。跳ね起き、身を低くして次の攻撃に備える。
無言のまま、次の攻撃は繰り出された。何度も、何度も。
音もなく、長い手足を使って私を床に沈めようとする彼の動きは、こんな状況でなければ見惚れるほど美しかった。
舞踊のようだ、と言ってもよかったかもしれない。
そんなことを考えながら、最小限の動きですべての攻撃をかわす。
わかっていた。手練れの、恐ろしいほどの身のこなしだけれど、彼は本気ではない。
私の動きを見ているのだ。実力を測るための動き。
間違いなくワザとだとは思うが、本当にごくわずか、攻撃の手が緩んだ瞬間、私は二、

三回バク転をして、彼と距離をとった。
「……どういうおつもり？」
「いい腕をしておられますね、エミール殿」
「ずいぶんと荒っぽいご挨拶ですこと」
私は精一杯カルナック大佐を睨みつけた。
「挨拶なら先ほど済ませました」と平然と応じる彼は、嫌味なことに息一つ乱していない。
まあ、私もだけれど。
「試したのね！」
今更だが、素っ裸に男物のローブを着ている私が戦うのは、色々な意味でハンデだらけだった。
きっちりと着込んでいたとはいえ、胸ははだけそうだったし、足を上げるたびに大事なところがすうすうして、心許ないことこの上なかったのだ。
「……異世界転移直後で心身共に衝撃を受けている女性に、よくもこんな仕打ちを……。覚えておくといいわ、呪ってやるんだから」
「あなたに呪われるなら本望ですよ」

「なっ⁉　……こ、このっ……」
馬鹿、とか、たらし、とかいう悪態は、すべて私の口の中で消えた。
オルギール・ド・カルナック大佐は、その凄絶な美貌を緩ませ、ふわりと微笑んでいたのだ。
美神の彫像に命が宿ったようだ。値千金どころか、まさにそれはプライスレス……
あまりの衝撃に頭のネジが二、三個飛ぶ音がした。
「……」
カルナック大佐は優雅に膝をつき、びっくりするほど丁重な仕草で私を助け起こした。
もちろんその間、私は絶賛放心中である。
「エミール殿は、先ほど嘘をつかれたでしょう？　できることなど特にない、侍女にでもしてほしいと」
……そう。私はさっき、何ができるかと問われて、結局は本当のことを言えなかった。
侍女にでもしてほしいと答えたのだ。得意なことなど特にないが、誠実に仕事をする自信はあると。侍女はあくまで思いつきで、もちろん下働きでもなんでもいいから、と。
彼は私の手を取って、そっと口づけた。
「我々を見誤らないでいただきたい。あなたが何もできないはずはない。あなたの目配り、挙措は只者ではない」

口づけた手を緩く握ったまま、彼は静かに、唄うように続ける。
「間者の類いかと、私はまだ少し思わないでもないのですよ。でも、閣下は既に疑ってはおられない様子。その上、あなたをなんらかの形で傍に置くことをお考えのようだ。ならば、力は測っておくべきでしょうし、それに」
ここでちょっと言葉を切り、笑みを含んだ紫の瞳を私に向ける。
「適材適所は組織の鉄則。あなたに侍女が務まるとは、私には到底思えなくて」
……なんか、物凄く失礼なことを言われたような気がするのは、私の気のせいだろうか？
「……そのようなお顔をなさらずとも。人には、それぞれふさわしい場所や役目がある。あなたに箒や塵取りは似合わない。それだけのことですよ」
カルナック大佐は、憮然とした私を宥めるように言った。
そしていきなり、私の肩と両膝の後ろにそれぞれ手を回すと、すいっと立ち上がった。
……抱っこされた。
四捨五入したら不本意ながら十の三倍に突入する私の、人生初のお姫様抱っこである！

さっき問答無用で殴り掛かってきた人ですよ！
おかしくないですか⁉
「⁉　……ち、ちょっと、カルナック大佐！　さっきから何の恨みで嫌がらせを」
私は手足を無駄にばたつかせた。もちろんまるで効果はなく、カルナック大佐の両腕はしっかりと私を捕らえて離さない。
「嫌がらせとは心外な。とはいえ、先ほどのことは謝りますよ。私の職責として、ご容赦いただきたいものですが」
柔らかい声で、カルナック大佐は言った。
そして、長い脚で優雅に歩き始める。
「疲れさせてしまって申し訳ございません。裸足でいらっしゃるし、床を歩いていただくには忍びないのです。とりあえず、休息を取られるのがよろしいかと」
「休息は取りたいけれど、とにかく下ろして」
「ご遠慮なさらず。手入れはされていますが、この部屋はしばらく使われていなかった客間です。万一何か落ちてなどいたら」
「絨毯から出た時、そのお言葉を聞きたかったですわ」
問髪を容れず文句を言ってしまった私は、絶対に悪くないと思う。

「カルナック大佐、とりあえず下ろして！」
「……今、我々がいるところは居間です。……内扉が二つ、ありますでしょう？」
この人、話を聞いてくれない！
「扉は後で見るから早く私を下ろして‼」
「向こう側の扉が衣裳部屋。今は何も置いておりませんが、後から準備させます」
華麗にスルーだ。私の抗議もじたばたもガン無視だ。
芸術品のように形のよい耳は、都合の悪いことはシャットアウトするらしい。
そうこうする間にも彼は歩を進めて、「こちら側」の内扉を私を抱いたまま器用に開けた。
「……うわぁ……」
思わず、私は歓声を上げた。
お風呂だ！
脱衣所と、手洗いらしき仕切りのあるスペースを抜けると、薄緑色の大理石でできた浴室があった。
シャワーだろうか。浴槽の傍の壁際に、何か突起物と取っ手がある。
不本意な体勢への抗議を諦めて私が身を乗り出すと、彼は簡単に操作方法を教えてく

立ち読みサンプルはここまで